

CONSERVATION VOLUNTEERS **7**

Vol.

—リーダートレーニング研究会報告特別号—

発行：特定非営利活動法人日本環境保全ボランティアネットワーク（略称：JCVN）

巻頭言__ 市民参加の松原保全 p1

実施報告__ リーダートレーニング研究会

8月20日開催『災害ボランティアの運営』 p3

9月24日開催『リスクアセスメント』 p4

11月2～4日開催『里山保全・復興支援活動実習』 p5

総括 p5

連載__ 環境保全ボランティア活動と若者の自立支援 p6
人材は「育成」か「生育」か p7

お知らせ__ リーダートレーニング研究会 p8
リーダーミーティング2014 p8
イベント・ボランティア情報 p8

巻頭言「市民参加の松原保全」

志賀壮史（JCVN 理事／特定非営利活動法人グリーンシティ福岡理事）

この数年、福岡の玄界灘沿岸では大変なマツ枯れ被害が起きています。JCVNでは、昨年度のリーダー・ミーティング「市民参加の松原保全」で、これまで長く松原保全に取り組んできた保全団体の取組みを伺い、参加者の皆さんと松原に対する思いや保全作業のノウハウについて意見交換しました。

被害が続くマツ枯れの現状を踏まえ、今年度のリーダー・ミーティングも引き続き、松原を含めた「海岸林（仮）」をテーマに掲げ、2014年2月11日に開催の予定です。詳細は追ってお知らせし

ますが、事前にマツ枯れのメカニズムや基本的な話題をまとめておきたいと思います。

松枯れのメカニズム

京都大学の二井一禎先生のご著書にある通り「マツ枯れは森の感染症」です。外来種であるマツノザイセンチュウと在来種であるマツノマダラカミキリが、驚くほどうまく協力しあって感染を広げていきます。

マツノザイセンチュウ（以下、センチュウ）の長さは1mm程度。これがマツの幹の中で水の通り道をふさぎ、水分不足でマツは枯れてしまいます。

マツノマダラカミキリ（以下、カミキリ）は、この枯死したり弱ったマツを選んで産卵します。元気なマツに産卵しても樹液（松ヤニ）で防御されてしまうからです。

卵から孵ったカミキリの幼虫は樹皮や幹をかじって成長し、そのまま幹の中で冬を越します。不思議なのは、冬を越して幼虫の羽化が近づくと、その周りにセンチウが集まってくることです。カミキリが成虫になると、センチウたちはまるで旅客機に乗るようにカミキリの体内に入り込みます。

5月上旬、枯れマツからたくさんのセンチウを連れたカミキリが飛び立ちます。お腹を空かせたカミキリが、好物であるマツの若枝にかじりつく際、センチウが飛び降りて（！）、かじられた傷跡から新しいマツに入り込みます。こうしてセンチウは新たなマツの中で繁殖し、枯らしていくのです。

マツ枯れの防除と枝拾い活動

マツ枯れ対策として国や自治体が行う防除には大きく分けて3種類あります。



①薬剤散布は、5～6月頃に空中ないし地上から薬剤を散布し、飛び立ったカミキリを駆除する方法です。②樹幹注入は、センチウを殺す薬剤を幹に注入することで、マツの巨木や景勝地のマツを枯死から守ります。③伐倒駆除は、感染したマツからさらなる被害が広がらないように枯れマツを伐倒し、破碎・薬剤処理等を行うことでカミキリの幼虫を駆除することです。③伐倒駆除では、伐っただけで林内に放置しておく、幹や枝の中でカミキリが羽化し飛び立っていくからです。直径2cm程度の枝でもカミキリの幼虫が入っていることから、小枝も含めて残らず拾い集めて、破碎処理等を行う必要があります。しかし、限られた予算ではくまなく小枝を拾い集める手間がかけられないことも多いようです。

一方で、この枝拾いは刃物や重機を使わず、体力もそれほど必要としないため、子どもからご年配までいろんな方が参加できます。松原保全のためのボランティア活動として、とっつきやすく確かな効果がある作業だと言えます。

枝拾い活動に適した時期は、自治体等による伐倒駆除（冬～春）が行われてから、カミキリが飛び立ち始めるゴールデンウィーク頃まで。集めた枝の処理方法を自治体等に相談しておく必要がありますが、松原保全のために市民ができることとして、各地で実践が広まることを期待したいと思います。



地域での合意形成を

松原の今後については様々な意見があります。白砂青松の景観という歴史・文化的な価値はもちろん、宅地・田畑への潮風の影響を抑えるという都市インフラ的な価値があります。一方で、防除のための行政コストや、薬剤散布が及ぼす人体・生態系への影響が問題視されています。例えば、福岡県の準絶滅危惧種であるハルゼミは、出現時期も生息場所もマツ枯れ防除のための薬剤散布と重なります。

効果的な松枯れ対策のためにも、より広い視野から海辺の自然を守るためにも、「本当に守りたい松原はどこか？」を議論する必要があります。その過程では、松原の縮小や林種転換も選択肢となるでしょう。

福岡県糸島市では今年11月、糸島市海岸林保全協議会が発足しました。有識者や市民代表らによる話し合いで、「海岸林」に対する同市の指針を決める集まりです。今後は、自治体や有識者、地域住民が対話する場を持ち、松原の今後について粘り強く合意形成していくことが必要です。その土台づくりとして、枝拾いや松葉かきなどの保全活動が、松原への関心を高め、理解や愛着を深める場になることと思います。

実施報告

平成25年度福岡県森林づくり活動公募事業 リーダートレーニング研究会

森林づくり、里山保全活動を広めるには、安全で楽しい活動となるように気を配るリーダーの存在が重要です。JCVNは「平成25年度福岡県森林づくり活動公募事業応募企画」として、「森林づくり里山保全活動のリーダー講座（全3回）」を実施しました。

最初の2回の座学では、「災害ボランティアの運営」と「リスクアセスメント」を実施し、合宿研修では、九州北部豪雨被災地の八女市黒

木町笠原地区を訪れ、日常から取り組む森林づくり活動が災害復興支援にどのように役立つのか、連携できるのか。また、美しく生物多様性に富んだ「里山演習林」づくりを通じて、雑木林の管理手法を学ぶとともに、山村地域と都市の連携・交流促進、森林保全への意識が高まることを目指しました。各回の内容を報告いたします。

■ 8月20日開催「災害ボランティアの運営」

朝廣 和夫（JCVN 副理事長／九州大学芸術工学研究院）

平常時に里山などの保全活動などのボランティアを運営する団体が、非常時のボランティア展開をどのようにすべきか。平成24年7月九州北部豪雨水害の復旧活動に取り組む山村塾の小森と、農林地復旧支援の研究を進める朝廣より話題提供させていただいた。小森からは、八女市黒木町笠原地区における、被災直後の地域活動における道あけや避難所支援の状況、その後の家屋の整理や農地・農業用施設の復旧支援について紹介された。朝廣からは、地域の人口が減少する一方、大規模災害が増加しつつあり、地域の強靭性（レジリエンス）を高めるために、自助・互助・公助を行う共助の強化の必要性を指摘し、釜石市における片岸町とNPO法人ねおすの活動事例、そして、八女市における被害分布と八女市社会福祉協議会、山村塾、星野村災害ボランティアセンターの月別活動人数の変化などを紹介した。後半の質疑応答では、主に運営面を中心に次の論点が議論された。



【活動組織】：東日本での活動体験者より、リーダーも準備体操もなく実施され、混乱したパターンも紹介された。リーダーの必要性が議論された。

【ボランティアの参加者層】：被災後1週間目はFacebookなどを通じ山村塾の会員や友人知人を中心に参加された。1か月目には参加の輪が広がり、地元の中学生や大学生の参加があり、2か月目ぐらいから、リピーターや、企業・団体の活動が中心となった。

【活動時間】活動時間は、朝集合し、現地に通うため、作業時間が短く、作業量が少なくなる点が指摘された。社会福祉協議会のボランティアについても、時間帯がある。

【現場のマネジメント】多様なボランティアが参加するため、コントロールが難しいとの指摘がされた。10～20名が望ましく、人数確認については午前・午後で行う、チーム作業については、時間で区切る、グループを変える、作業内容を変えるなどの対応が紹介された。

【ケガ・事故】山村塾の活動では、3,000人中、2人程度が腰痛などの症状が出た。リスク管理として、朝のオリエンテーションなどでの、声出し挨拶や毎日安全面について伝達する重要性が指摘された。

【事後トラブル】ボランティアで片づけた家屋や農地について、事後の復旧過程で所有者が解体や残土置き場にしたため、後日ボランティアや地域からクレームが出た事例があった。被災者の判断には時間の経過が必要であり、支援側は、その可能性を含めて行う必要があると議論された。この

点は、被支援者・支援者双方からクレームが出ており、実施主体として情報管理がなされる要因となっている。

アンケートによると、具体的事例の紹介と議論により理解が深まったという意見がある一方、議論

を深める時間が不足したという指摘が行われた。また、森林環境税の事業として、このような非常時のテーマをどのように扱うかも、今後の課題と想定された。

■ 9月24日開催「リスクアセスメント」

小森 耕太 (JCVN 理事/山村塾事務局長)

9月24日(火)に、福岡市NPO・ボランティアセンターあすみんにて、JCVN リーダートレーニングの中で最も特徴的かつ定番であるリスクアセスメントをテーマに行いました。だれもが安全は大切、事故は起こしたくないと思っていますが、では具体的にどのように準備し、行動すればよいのか?それを導き出す手法の一つとしてリスクアセスメントはとても有効だと考えられます。

9/24 当日、まずは導入として「ヒヤリハット事例の共有」。3人組となり、お互いのヒヤリハットした体験について紹介し合いました。さすが皆さん、様々な経験をお持ちの方が集まっているだけあって、多種多様な事例が出てきました。リスクマネジメント(安全管理)に取り組む上で、はじめの一步は危険を知ることです。一人一人の経験には限りがありますので、こうして多くの事例を知ることは重要です。

続いて講義「リスクマネジメント(安全管理)」。ここでは、一般的なリスクマネジメントについての考え方を整理し、その重要性や事故が起きる要因について理論を手短かに整理しました。そして、いよいよ本題の「リスクアセスメント(危険評価)」へ。①危険を予測→②度合いと頻度→③対策→④対応を考えるとというリスクアセスメントの手順を説明した後に、実習を行いました。子どもたちの竹細工体験プログラムを題材に、まずはどんな危険が潜んでいるのか各人で考えてもらった後、全体での共有。「竹を振り回してケガをする」や「放置したナタでケガをする」といった危険が出てきました。続いてはグループに分かれての実習です。はじめに評価部分。事故が起きた時の度合いと頻度についてそれぞれ3段階評価を行います。度合いは、3(重症や死亡事故)、2(病院へ行く必要がある中程度のケガ)、1(病院へ行かない軽いケガ)となり、頻度は、3(頻繁に起こりうる)、2(起こりうる)、

1(めったに無いがひょっとしたら)です。そして、事故を起こさないための対策について。全体での共有と振り返りを行いました。

度合いと頻度の段階による評価は、グループごとにいろいろと異なるものが出てきました。これはイメージした状況や経験度によって分かれるところが多かったようです。対策については、抽象的な対策にならないように出来るだけ具体的に書くことを助言させていただきました。



全体ディスカッションやアンケートによると、今回は竹細工や里山保全作業などの未経験者の方も多く参加されていたこともあり、状況設定(竹細工体験)をもっと細かく伝えた方がよいことや道具や竹の実物があると分かりやすいなどの意見がありました。ですが多くの方がリスクアセスメントの手法はわかりやすく、他分野の活動でも応用できるのではといった印象を持たれたようです。個人的には、平理事の板書サポートと初コンビを組めたことが良い経験となりました。せっかくの「研究」会なので、新たな講師や講座の組み合わせに挑戦できると良いなあと思いました。今後の研究会も楽しみです。

■「里山保全・復興支援活動実習」報告

重松 敏則 (JCVN理事長)

災害復興支援活動の視察と体験、ならびに雑木林の手入れ等を通じてリーダーのあり方を学び、講師・参加者の意見交換でその学びを深めていくことを目標として、11月2～4日に福岡県八女市黒木町の笠原東交流センター「えがおの森」(元笠原東小学校)を会場に2泊3日の合宿方式で行われました。参加者は8名の応募者に加え、フランスとモンゴルの若者を含む6名の「里山80日間ボランティア」のメンバー、ならびに講師・運営スタッフ7名と総勢20名におよびました。

初日の2日は、午前10時からのオリエンテーションに続き、志賀壮史氏により「リーダーとは」、ならびに、小森耕太氏により「山村塾と笠原地区の紹介」について、それぞれ復習と予習が行われました。午後はマイクロバス等に分乗して昨夏の洪水被害地を視察し、その後、災害復興支援活動実習として、復旧された水田での大小の石集めと撤去作業が、熱心に進められました。

3日は午前9時より、座学として、まず筆者が「我国の里山について」、ほぼ60分間にわたり里山林の多面的効果について、自然林やスギ・ヒノキ人工林と対比させながら、現状での問題点や管理による森林環境の改善による意義を、パワーポイントを用いて解説しました。さらに都市住民や青少年の里山管理による環境教育的かつ社会福祉的効果や、過疎の農山村と過密の都市との人的・物的交流による相互支援について、社会的システムの構築の必要性を述べました。

質疑応答の後、引き続いて、塚本竜也氏により、活動事例紹介として「トチギ環境未来基地」の多面的な取り組みと効果について解説されました。まず、東日本大震災の津波による海岸マツ林の壊滅的な被害に対して、募金活動によるクロマツ苗の購入と学校や家庭等への配布による育苗支援、そして海岸へのボランティアによる植樹と、一連

の継続的な活動展開が紹介されました。さらに引きこもりの青少年を幼稚園の森づくりなどの里山活動に参加誘導することによる社会復帰の目覚ましい効果や、園児の森での遊びによる自然への好奇心(Sense of wonder)醸成の効果について説明されました。

質疑応答と休憩の後、全体ディスカッション「里山保全と復興支援活動」について活発な意見交換が行われました。

午後は13時に宿舎を出発し、管理放棄されたスギ・ヒノキ等の視察の後、JCVN演習林に移動し、「雑木林の手入れ」の実習として、竹が侵入し、かつ常緑広葉樹林化が進行する典型的な里山放置林での伐竹と中・低木類の除伐を行いました。2時間程度の作業にもかかわらず、多人数で熱心に取組まれたため、予想以上の見通しのきく林間環境に改善されました。

最終日の4日の午前は天候回復によるスケジュールの変更として、JCVN演習林での手入れが続行された結果、林間を通して棚田や集落のたたずまいが見通せるまでの成果が得られ、参加者全員が大きな達成感に満たされたようでした。「JCVN演習林」として胸を張って紹介できるようになったことから、筆者より小森耕太氏に演習林長を担当していただくようお願いしました。

毎日の夕食後には、参加者からの活動紹介や懇親会などもあり、和気あいあいとした、楽しく充実した自炊方式の学習合宿が無事終了しました。



■総括

小森 耕太 (JCVN理事/山村塾事務局長)

福岡県森林づくり活動公募事業の支援を受けて、全3回のリーダートレーニング研究会を無事に終了することができました。ご参加ご協力いただいた皆様に御礼申し上げます。

これまで、JCVNは森林づくりや里山保全活動、農林作業といった現場での環境保全活動

を中心に人材育成およびそのネットワーク形成に取り組んで来ました。今回は、その枠を超え、災害支援分野に対してどのように応用できるのかということ全体をテーマに掲げて研究会に臨みました。それには二つの理由があります。一つは、緊急的な活動である災害支援

の現場は、安全確保や現場進行などのボランティアのコーディネートが大変難しく、またその現場を統括するリーダーやコーディネーターの方々の経験値も不足しがちであるということ。近年、災害が多く発生するようになってきたとは言え、一般の方々には直接的な体験はありません。森林づくりなどの現場作業に日頃から携わっているボランティアの方は、災害発生時には災害支援の現場リーダーやそのフォロワーとして貢献できるのではないかと考えました。

もう一つは、JCVNの事業にもっと多様な方々を巻き込みたいということです。平常時の森林ボランティア活動には、当然ながら森林での作業をやりたい人が集まって来るのですが、作業をやりたい人とそれを巻き込み広めていく人はイコールではありません。環境保全の取り組みを更に強固に広めていくには、多様な組織や人たちとの連携が必要不可欠であると考えました。

全3回を振り返ると、第1回、第2回の座学は、大変好評ではありましたが、時間がやや不足していたようで、もっとお互いのディスカッションなどを行い、話を深めたいといった意見が見受けられました。第3回の実習は、2泊3日を山村エリアで行うというハードな参加条件のなか、意欲的な参加者の方々に集っていただきました。研究会としては、緊急時の災害ボランティ

アと平常時の環境保全ボランティアについて、共通点や相違点、応用するための課題などを整理したい目標がありましたが、そこはやや目標到達まで時間不足という感がありました。せっかく山村で2泊3日を過ごすのだから、雑木林の手入れや農地の復旧作業といった現場での活動を満喫したいというもう一つの目標もありましたので、研究会の要素と時間枠を取り合った印象でした。

全3回とも、参加人数はやや目標を下回りましたが、参加された方の属性を見てみると、環境保全活動初心者から10年以上のベテランまでとなり、本事業の目的であった多様な方々を巻き込むという点では、成果があったようです。

公募事業の支援を受けての実施は終了しましたが、今後もリーダートレーニング研究会は継続して取り組んで行きたいと考えています。ご希望のテーマや内容がございましたら、ぜひご提案をお願いします。様々な方々と連携しながら環境保全に携わる人を増やしていければと思っております。今後ともどうぞよろしくお願ひします！

平成25年度森林づくり活動公募事業としてはこれで完了ですが、リーダートレーニング研究会は引き続き行っています。次回は、1月27日「地域をどう巻き込むか」。詳細はお知らせページにてご案内しています。

連載

JCVN 理事による経験とノウハウの詰まった連載コラム！

■環境保全ボランティア活動と若者の自立支援（7）

若者自立支援団体利用プログラムを出発点としたグリーンパス（緑のキャリア形成）の可能性①

塚本 達也（JCVN 理事／特定非営利活動法人トチギ環境未来基地理事長）

若者自立支援団体を利用する若者が抱える困難は一人ひとり異なり、現時点で必要としている支援やトレーニングも異なります。しかし、プログラムを利用する若者の多くが経済的な自立を含む、自立を目指して努力しています。経済的自立を果たすためには働いて賃金を得る必要があります。

かつて林業など第一次産業は3Kと呼ばれ若者の就職先としては不人気でした。今も人気職種とは言えませんが、新規就農する若者は増えてい

ます。また、林業従事者も平成6年から14年の新規就業者は平均1,861人であったのに対し、平成15年から23年の新規就業者数は平均3,411人と1.8倍に増加しています。（参考：一目でわかる林業労働データ編）日本の雇用情勢全体からみればまだまだ小さな変化ですが、変化は生まれているのです。

林業就業者が増加を始めたのは、平成15年から緑の雇用制度が始まり林業に就業する道が一つ増えたということも大きな一因です。しかし、

それだけでなくもう一つの大きな理由は若者の価値観の変化にあると思います。3Kの一つ「きたない」は、環境理解が深まる中、自然や土の汚れを「きたない」と感じる人は減り、人体に影響がある化学物質のほうがよっぽど「きたない」と正しく考える人が増えているのではないのでしょうか。また3Kのもう一つ「きつい」は、これまで身体的な、体力的なしんどさを指していましたが、現代の若者の多くは精神的なきつさ(ノルマ、競争、人間関係、欺瞞など)にまっています。ディセントワーク(働きがいのある、人間らしい仕事)への希求が高まっています。

林業従事者の減少、高齢化が進む中、林業を目指す若い力が増えることは今後の日本にとって大変重要なことです。環境保全全体が若者自立支援団体との連携を強化することで、その人材供給の一翼を担えるのではないかと考えています。もちろん、本人の自己選択としての林業就業者を増

やすと意味においてです。たくさんの若者たちと森林、環境保全の現場で活動をしてきましたが、そのような若者の仕事に対する希望と第一次産業の仕事の親和性は高いと感じます。

もちろん林業の仕事は厳しさや困難さ、3Kの最後の一つ「きけん」は伴います。簡単ではありませんが、本人が努力をすれば力を付けて行くことができるキャリアパスをきちんと敷くことで育てていくことはできると思います。そのキャリアパスを、緑の雇用の手前から、つまり、若者自立支援団体が提供するプログラムの中に入れ込んでいくことができればその可能性、その対象者はぐっと広がります。

では、どのように、どんな内容のプログラムを組み立て、グリーンパスとして構築していくことができるか。私案になりますが、次号以降具体的に考えてまとめていきたいと思っています。

■人材は「育成」か「生育」か(7)

平 由以子 (JCVN理事/特定非営利活動法人循環生活研究所理事長)

「まだまだだなあ」

平成9年から始めたNPO活動、一生懸命にやっていると、内容は少しずつ充実してきて広がりをを見せてきます。しかし、その反面で自分に足りないところもだんだんわかってきます。その葛藤は今もなお続いています。

日頃は、土や堆肥の講座や農園の作業、学生との年間プロジェクトという仕事があります。このほか生産者と消費者の間に立つという「おせっかい仕事」までしています。通常の仕事の大変なところはというと、早朝の仕事に加えて、モノやお金やいろいろなセクターがからんでくるので、交渉事やクレーム処理、小さな雑務が多いこと。状況によっては仕事がなんとなく中途半端に見えることもあるので、外部だけでなく内部の理解にも気を配ることも大切です。

一方、「おせっかい仕事」には、ファームの会計処理のほか会議や勉強会も含まれ、その中で土づくりの基本から農業のトレンドの話、カラスの習性や畑での事件など、こちらが話題を提供することを通じて自らの勉強になることがたくさんあります。しかし、生産者のみなさんに対して、やみくもに農薬や化学肥料をやめようと言って

いるだけでは、実際は誰も話を聞いてくれません。私たちが10年間無農薬・無化学肥料で生産している野菜がプロの農家の方々と肩を並べていくことで、少し認めてもらえることもあります。とにかく手間暇かけてやると半歩くらいのスピードでしかすすまないのです。

成長が遅いことが活動に対する愛情につながっていく。裏を返せば、成果が見えにくく、部分的にかかわっているメンバーにとっては、大変なだけの仕事にも見えるし、忙しいために行き違いが生じることもあります。いちばんスムーズにいくときは、生産者やメンバーと無駄話しや冗談を言い合う時間がたくさんあるとき。農業もゆったりとした農耕文化の時代から、現代農業に移行する中で多くの無駄が省かれ効率化してきましたが、無駄と思われがちな、お互いの共有する時間がどれだけ大切かあらためて実感しています。知識ではわかっていることが、実際に現場で話していくことで、相互の理解が徐々に進み、私たちが「課題」と思っていることが実際にはどの辺りに位置づけされていて、どこにつながっているのかが見えてくることもあります。

人に関わる力も、自然に関わる力も半歩ずつ養っていきたいと思うのでした。

お知らせ

イベント・ボランティア情報

●リーダートレーニング研究会

意見交換しながらリーダーについて学びを深めます。「安全なボランティア作業を目指したい」「リーダーやリーダーシップについて考えたい」という方は是非ご参加ください！

◇第7回「地域を巻き込むには」

日時 平成26年1月27日 18時半～20時半
場所 福岡市NPO・ボランティア交流センター
進行役 たいら由衣子 (JCVN 理事)
朝廣和夫 (JCVN 副理事長)
参加費 (会員) 無料 (非会員) 1,000円
※申込み・問合せは事務局まで。

●リーダーミーティング2014「海岸林の再生(仮)」

昨年度に引き続き、マツ枯れ被害の続く松原がテーマです。アダプト制度による保全活動、震災復興と防災、松葉の堆肥化など、いろいろな切り口から、環境保全ボランティアの広がり、これからの海岸林再生をワイワイ語りましょう！

日時 平成26年2月11日 13時～17時
場所 福岡ビル9階大ホール
共催 NPO法人グリーンシティ福岡
NPO法人日本環境保全ボランティアネットワーク
問合せ info@greencity-f.org
※詳細は追ってお知らせいたします。

●各地でのイベント・ボランティア情報

◇志賀島森林保全ボランティア

より多くの方に足を運び、楽しめる志賀島を目指し、秋から冬にかけて島内外の皆さんと一緒に作業を行っています。1回だけの参加もOK。

日時 1月12日(日)、2月5日(水)、3月8日(土)
各回とも、10時～15時
集合 志賀島「志賀海神社駐車場」
申込 グリーンシティ福岡事務局
TEL/FAX 092-215-3913
WEB申込 <http://www.greencity-f.org>

◇里山ミニワーク「農産加工(納豆・味噌)」

昔ながらのワラ苞(ヅト)納豆、手製の味噌づくりを行います。

月日 2月15日(土)～16日(日)
参加費 一般6,500円、山村塾会員5,500円、

学生・子ども3,000円

集合 9時 黒木総合支所(八女市黒木町)
申込 山村塾事務局
TEL/FAX 0943-42-4300
メール info@sansonjuku.com

◇生ごみ堆肥を使った菜園講座

堆肥づくりから野菜の収穫まで、実際に見て・触って体験します。

とき 2/1(土) 13時半～15時半
参加費 無料
場所 福岡市東区蒲田 クリーンパーク・東部
申込 循環生活研究所事務局
TEL 092-405-5217
FAX 092-405-5951

●JCVNの仲間を広く募集しています！

あなたの支援が、「いつでも」「どこでも」「だれでも」できる環境保全活動をめざした団体のネットワークづくりの力になります。

- ・個人正会員(¥10,000/年)
- ・個人賛助会員(¥5,000/一口以上)

会報が年に4回お手元に届きます！また、メールリングリストでもJCVNが開催・協力するイベント情報等を随時ご案内いたします。活動への寄付も受け付け中！お問合せは事務局まで。

[会費・寄付振込口座]
番号：01760-9-122407
名称：日本環境保全ボランティアネットワーク

今年も一年、活動へご支援・ご協力いただきありがとうございました。来年もよろしく願いいたします。

CONSERVATION VOLUNTEERS 7

- 発行日：平成25年12月20日
- 発行頻度：年4回
- 発行：特定非営利活動法人日本環境保全ボランティアネットワーク(略称：JCVN)
- 事務局：〒810-0022福岡市中央区薬院4-5-2-202
tel/fax: 092-215-3966
e-mail: jcvn@greencity-f.org